

平成三十一年度

大妻中学校海外帰国生入学試験 国語

平成三十年十二月十六日実施

試験開始の合図があるまで問題用紙は開かず、左記の注意事項をよく読んでおいてください。

- 一、問題は26ページまであります。足りないページや、印刷のよく見えないページがあったときは、手を挙げて申し出てください。
- 二、解答用紙は別紙になっています。答えはすべてそこに記入してください。
- 三、解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として含めます。
- 四、問題用紙には、受験番号・氏名を書く必要はありません。

一

次の文章は、福江翼ふくえつばさの著書『生命は、宇宙のどこで生まれたのか』の一部で、約6500万年前に恐竜が突如絶滅したことなどについて記した後に、この文章が続いている。これを読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を変えているところがあります。）

地球上には、過去、恐竜をはじめとして、現在では存在しない生命が暮らしていました。自然淘汰とうたの中で絶滅する生命もいたでしょうが、地球上の生命が突然に大量絶滅したことは、前述の恐竜の例だけでなく、過去に何度もあるようなのです。

①このことは、過去、なんらかの異常事態が地球上で何度も起こってきたのではないかと想像させます。これまで大量絶滅が何度も起こっているのであれば、今後もまた起こるのでしょうか。人類の将来にとっても重大な問題です。

地球上の過去の生命の歴史を調べるひとつの方法は、たくさんの化石を詳細しようさいに調べることです。ある生命が絶滅した時期は、化石の大規模な調査から推測されます。過去のある年代以降の化石の中に、ある生命の化石が見つからなくなれば、その生命はその年代の前に絶滅したのだろうと考えられます。

A、恐竜が約6500万年前に絶滅したと考えられているのは、6500万年前までの恐竜の化石は見つかるのですが、それ以降の恐竜の化石が見つからないからです。B地球上の「すべての」化石を我々は発掘はつくわしているわけではありません。そのため、化石から絶滅状況じつじょうきょうを調べる際には慎重しんちょうに研究が進められています。

これまでの研究では、地球上の生命が大量に絶滅したと考えられる時期が何度もあることが示唆しそされています。

C、その大量絶滅の時期についてなのですが、過去に何度も起きていたばかりではなく、D、「定期的に」起こっていたのではないかという説が数十年前からあります。海中の動物などの化石から、過去の絶滅状況を調べたところ、だいたい2700万年ご

とに大量絶滅が起こっていたのではないか、という研究が発表されています。

②かなり議論のある説ではあり、今後の進展が待たれますが、もし本当なのであれば、なにか特別な原因があると考えられます。そして、地球上に再び大量絶滅の危機が訪れることが強く予想されます。

なぜ大量絶滅が定期的に起きうるのでしょうか。ひとつの有力な可能性は、巨大隕石きょだいいんせきや大量の隕石などが定期的に地球に落下してくる可能性です。

まず、太陽系の外部には、岩石や氷などでできた小さなかたまりが散らばっています。③それらが、「なにか」の重力によって運動の向きが変えられて、太陽系中心部へ向かって落ちてくる可能性があります。その中には地球に衝突しょうとつして大量絶滅を引き起こすものもあるかもしれません。

地球に対して隕石いんせきによる爆撃が定期的にかかるということならば、太陽系の外側にある④「なにか」が重力的な影響えいきょうを定期的に及ぼしているのではないかと考えられます。定期的に影響を及ぼすということから、その「なにか」は、同じ場所をぐるぐるまわっているのではないかと予想されます。

太陽系でそういった運動を起こす可能性のあるものと考えていくと、惑星わくせいのように太陽の周りをぐるぐるまわっていると推測されるわけです。大量絶滅の定期期間は非常に長いので、おそらく太陽から（地球からも）遠く離れたところはなでゆっくり動いているのでしよう。

1984年には、実は太陽には双子ふたごの星が存在しており、太陽系のずっと外側に、その双子の星がまわっているのではないかと、というアイデアが提案されました。

この仮説上の星は「ネメシス」と名づけられ、このネメシスが重力的な乱れを引き起こして、太陽系の外側から太陽系内部に向かっ

て彗星をたくさん落としてくるのではないかと考えられたのです。

現在の宇宙科学においては、太陽は双子星ではなく単独の星であるとしてさまざまな理論が構築されていますから、万が一、双子星であったとすれば、生命の大量絶滅の問題だけでなく、宇宙科学的にも非常に大きな問題です。

⑤ 仮説上の星、ネメシスについては、その存在は現段階では確認されていません。研究者の間では激しい議論があるところです。重力的な影響を及ぼすためには重たければよいので、星というよりはむしろ巨大なガス惑星のような可能性も考えられています。大量絶滅の周期性やその原因と共に、よくわかっていない問題です。

観測上の問題としては、太陽系の外側は地球から遠いため、また、太陽の光が届きにくく暗いことなどから、どうしても地球からの観測が難しくなってしまう点が挙げられます。そのため、これまでの観測システムでは、太陽系の外側にネメシスのようなものが存在していたとしても、見つけられない可能性があります。

太陽系における人類の調査の最前線は、実はまだ太陽系の端まで到達しているわけではないのです。宇宙の端がどうなっているのかとはよく聞かれますが、私たちが住んでいる太陽系の端ですら、まだまだ不思議がいっぱいなのです。

今後、大規模な望遠鏡計画や、探査機の計画が予定されていますから、それらの成果でさらにいろいろなことがわかってくるでしょう。

問1 ———線①「このこと」が指す内容を、文章中の言葉を使って、二十字以上二十五字以内で答えなさい。

問2 文章中のA～Dの空らんにはまる言葉として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使いません。

イ さて    ロ さらに    ハ つまり    ニ たとえば    ホ もちろん    ヘ だからこそ

問3 —線②「かなり議論のある説ではあり」とはどのようなことを表すか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ しつかりとした証拠しょうこのある説だということ。
- ロ 長いあいだ研究されてきた説だということ。
- ハ 反対する意見も少なくない説だということ。
- ニ 社会でかなり評判になった説だということ。

問4 —線③「それらが」はどこにかかるか。最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

それらが、「なにか」のイ重力によって運動の向きがロ変えられて、ハ太陽系中心部へ向かってニ落ちてくることがホあります。

問5 —線④『なにか』について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 『なにか』とかぎかっこを付けて表現されているのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 「なにか」があることは間違いまちがないという筆者の確信を伝えたいから。

ロ そういうものが仮に存在するとしても、その正体はわかっていないから。

ハ 「ネメシス」という正式名称めいしやうは隠かくしておいて、後で読者を驚おどろかせたいから。

ニ 大量絶滅を再び起こす可能性のある、未知の存在への不安が筆者にあるから。

(2) 『なにか』はどのようなものでなければならぬか。条件として必要なことを、次の中から二つ選んで記号で答えなさい。

イ 太陽系の内部に向かって落ちてくること。

ロ 太陽の周りをゆっくりまわっていること。

ハ 太陽と双子の関係にある星であること。

ニ ネメシスの重力の影響を受けていること。

ホ 重力が十分大きい影響をあたえること。

ヘ 星でなくて、巨大なガス惑星であること。

問6 — 線⑤「仮説上の星、ネメシスについては、その存在は現段階では確認されていません」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「ネメシス」が存在していたとしても、「確認されていない」ない主な理由は何か。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ ネメシスは地球から遠いから。
- ロ ネメシスは仮説上の星だから。
- ハ ネメシスはガス惑星だから。
- ニ ネメシスは重力が強いから。

(2) 「現段階では」とことわっているので、筆者が「将来、ネメシスの存在が確認される可能性もある」と考えていることになるが、筆者がそのように考えるのはなぜか。その理由を説明した次の文の【 】に当てはまる、三十字以上四十字以内の表現を、文章中の言葉を使って答えなさい。

・今の観測システムでは見つけられなくても、【 】から。

1  
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を変えているところがあります。)

夕食のあいだじゅう、恭介はきげんが悪かった。きげんの悪い時、恭介はいつも思う。僕はジャングルに住みたい。  
「もうすぐ、卒業式ね」

すきやきのなべにお砂糖をたしながら、お母さんが言った。

「そうしたら、恭介も中学生か」

お父さんが言った。

「まだだよ。まだ二月だから小学生だよ」

「でも、もうすぐじゃないか。入学手続きだつてすませたんだろ」

「うん」

恭介は①ぶつちようづらのまま、しらたきを口いっぱいにほおぼった。

今朝、学校に行ったら、女の子たちがサイン帖をまわしていた。もうすぐおわかれだね、とか、さみしいね、とか、そんなことばかり話していた。ひとりが、恭介のところにもサイン帖を持ってきた。

A 「もういいわよ。暮林くんになんかたのまない」

B 「何だよ。書きたくないんだからいいだろ」

C 女の子はきまり悪そうにそこに立っていた。

D 「だって、さみしくねえもん」

E 「俺、書かないよ」

F 「どうして」

女の子はサイン帖をかかえたまま、小走りで自分の席にもどった。みんなの視線が恭介にあつまる。

「ちえつ、何だよ」

恭介はどすんと席にすわった。机の上に、一時間めの教科書と、ノートと、ふでばこをだす。ちえつ、あいつも見ていた。ななめ前の方から、暮林くんのいじわる、という顔をして、恭介を見ていた。一時間めは算数だった。担任の大島は男らしくない、と恭介は思う。たとえば今日だって、

「問五、暮林くん、やってみてくれるかな」  
なんて言う。

「問五、暮林やれ」  
がふつうだと思う。恭介は立ちあがった。

「わかりませーん」

と言う。算数はきらいじゃないけれど、今朝はなんとなくいやな気分だったし、わかりません、と言えば先生が自分でやってくれることがわかっていた。

「わからないのかあ。問四の応用なんだけどなあ」

先生は頭をかきながら、黒板に問題をといてみた。

「これは基礎だからね。これがわからないと中学に行って苦労するぞ」

給食は、あげパンと、とん汁と、牛乳とみかんだった。恭介は給食当番で、かっぱう着を着て給食をとりに行く。

「② やった。とん汁だ」

恭介は、今までとん汁の日に給食当番になったことが一度もなかった。教室のうしろに立って、一人一人の器にとん汁をつぐ。みんなステンレスのお盆を持って一列にならぶ。あと三人、あと二人、あと一人。恭介はドキドキした。あいつの番だ。

「少しにして」

あいつが言う。恭介は、なるべく豚肉の多そうなところを、じゃばつと勢いよくつぐ。なみなみとつがれたとん汁をみて、あいつはまゆをしかめた。

「少しにしてって言ったでしょ」

「せんせーつ、野村さんが好き嫌いします」

恭介が声をはりあげると、大島先生はまのぬけた声でこたえる。

「それはよくないなあ。野村さん、がんばって食べてごらん」

野村さんは、大きな目できゅつと、恭介をにらみつけた。

お母さんが、恭介のちゃわんに、くたくたに煮えたすきやきのにんじんを入れた。

「好き嫌いしていると背がのびないわよ」

実際、恭介は背が低かった。野村さんは女子の中でまん中より少し小さく、その野村さんとならんで、ほとんどおなじくらいだった。

「もういらないよ。ごちそうさまっ」

恭介ははしをおいて、二階にあがった。部屋に入るとベッドの上に③大の字に横になる。野村さんの顔がうかんでくる。④動物でいうならパンビだ、と恭介は思う。三年生の時にはじめていっしょのクラスになって、四年生は別々で、五年生、六年生とまたいっしょになった。野村さんについて恭介が知っていることといえば、保健委員で、とん汁が嫌いで、女子にしては足がはやい、ことくらいだった。今朝あんなことがあったから、今日は一日、誰も恭介にサイン帖を持ってこなかった。もちろん野村さんもだ。恭介はベッドからおりて、机のひきだしをあげた。青い表紙のサイン帖が入っている。⑤ちえつ、恭介はひきだしをしめて、もう一度ベッドに横になった。

中学にいったら生活が変わるだろうなあ、と恭介は思った。勉強だつてしなくちゃいけないし、先生だつて大島みたいなおんきなやつじゃないにきまつている。野球とか基地ごっこばかりをやっているわけにはいかなくなる。クラスのみんなもばらばらになつてしまふ。あいつなんか私立にいつてしまうから、なおさら会えない。あーあ。ジャングルに住みたい。

ジャングルに住んだら、と恭介は考える。勉強もない、家もない。洋服も着ない。穴をほつてその中で暮らそう。ライオンとゴリラを飼おう。狩りをして、その獲物を食べればいい。皮をはいで毛布にしよう。となりのほら穴にあいつが住んでいて、僕があいつの分も狩りをしてやる。僕とあいつのほかには人間は誰もいなくて、猿とか、へびとか、しまうまとか、ペットつぽくない動物だけが住んでるといい。

恭介が大島先生に呼びだされたのは、次の日の放課後だった。職員室はストーブがききすぎていてあつい。大島先生は今まで生徒を呼びだしたことなど一度もなかったので、恭介は少しドキドキした。

「わざわざ呼びだしたりして悪かったね」

先生が言った。

「何の用だと思う」

「わかりません」

「そうだよな。ずいぶん前のことだし」

「はあ」

「去年の春に、遠足に行つたら。あるとき買い食いしたのは暮林くんだけじゃないって、わかってたんだ。代表でおこられてもらったんだよ。すまなかつたね」

「はあ」

「話はそれだけだ。もうじき卒業だから、きちんとっておきたくてね。じゃ、気をつけて帰れよ」

「……はい」

「いったいなんなんだ。へんなやつ。恭介は下駄箱げたでくつをはきかえながら、まだ心臓がドキドキしていた。もちろん、遠足のときのことは恭介もよくおぼえていた。」

僕と、高橋と、清水と、それから三組のやつらも何人かいっしょに、アイスクリームを買い食いつた。集合の時、僕だけがおこられた。――でも、そんな昔のこともういいよ。教師があやまるなんて、気持ちわるい。ちえつ、大島ともあと一カ月のつきあいだと思うとせいせいする。

大島先生の言葉や態度は、いつも恭介をイライラさせる。すまなかつたね、なんて。もうじき卒業だから、なんて。

「あれ」

下駄箱の奥おくに、白い表紙のノートが入っている。サイン帖だった。

「誰のだろう」

ぱらぱらとページをめくり、恭介はびくんとして手をとめた。あいつのだ。あいつのサイン帖だ。どのページもみんな、なみちゃんへ、で始まっている。なみちゃんというのは野村さんの名前だった。⑥ 恭介は、すのこをがたがたとけつて校庭にとびだした。冬の透明な空気の中を、思いきり走る。かばんがかたかた鳴る。

家にとびこんで、ただいま、と一声になると、恭介は階段をかけあがり、自分の部屋へやに入った。かばんの中からサイン帖をだす。野村さんのサイン帖。一ページずつ、たんねんに読む。おなじような言葉ばかりが並んでいた。卒業、思い出、別れ、未来。

「おもしろくもないや」

声にだしてそう言って、恭介はノートを机の上にぼんとほうった。

その日はそのあとずっと、サイン帖のことが頭をはなれなかった。夕食のあいだも、おふろのあいだも、テレビをみているあいだも、恭介は頭のどこかでサイン帖のことを考えていた。みんなの前で、僕は書かないよって言ったんだ。書けるわけがないじゃないか。それなのにこつそり下駄箱に入れるなんて、絶対、書いてなんかやるもんか。恭介はいつもより少し早く、自分の部屋にひきあげた。

ドアをあけると、机の上の白いノートがまっさきに目にとびこんでくる。あーあ。やっぱり僕はジャングルに住みたい。ジャングルには卒業なんてないもん。そりゃあ、中学にいけばいいこともあるかもしれない。あいつよりかわいい子がいて、大島よりぼんやりした教師がいるかもしれない。でも、それはあいつじゃないし、大島じゃない。僕だって、今の僕ではなくなってしまうかもしれない。恭介は机の前にすわり、青いサインペンで、ノートに大きくこう書いた。

野村さんへ。

俺たちに明日はない。暮林恭介

いつか観<sup>み</sup>た映画の題名は、そっくりそのまま今の恭介の気持ちだった。

次の日、恭介がサイン帖をわたすと、野村さんは、

「ありがとう」

と言ってにっこり笑った。机のひきだしにしまっている自分のサイン帖のことが、恭介の頭をかすめた。あいつの下駄箱に入れておいたら、あいつは何て書いてくれるだろう。女の子だから、やっぱり思い出とか、お別れとか、書くんだろうか。恭介は、首のあたりがくすぐったいような気がした。教室の中は、ガラスごしの日ざしがあかるい。

「おはよう。みんないるかあ」

教室に入ってきた大島先生が、いつものようにまのぬけた声で言う。もう三月が始まっていた。

(江國香織<sup>えくに かおり</sup>「僕はジャングルに住みたい」による)

問1 —線①「ぶつちようづら」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「ぶつちようづら」の意味を調べると、辞書に次のように書いてあった。(1)・(2)のそれぞれに当てはまる、ひらがな四字以内の言葉を答えなさい。

・不(ふ) (1) な顔。無(む) (2) な顔つき。ふくれっつら。

(2) 「恭介」が「ぶつちようづら」をしているのはなぜか。理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 複雑な気持ちをすなおに表せず、ついいじわるをしてしまうような自分が、自分でもどうしていいかわからないから。
- ロ 恭介は学校で今日あったことを話したいのに、お父さんもお母さんも先走って中学のことばかり話題にしたがるから。
- ハ お母さんが、恭介が気にしている背の低さを持ち出して、嫌いなしらたきやにんじんを無理に食べさせようとするから。
- ニ ちよつとしたことで職員室に呼びだされただけに、ドキドキしてしまった自分の気の小ささがなさけなかったから。

問2 点線で囲んだA～Fの六行は、元の文章と順番が入れかえてある。正しい順になれば直すところのようになるか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ〔B・A・C・E・F・D〕

ロ〔B・C・D・A・E・F〕

ハ〔E・A・B・F・C・D〕

ニ〔E・F・D・C・B・A〕

問3 ー線②「やった。とん汁だ」とあるが、この時の「恭介」の気持ちとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 大好きなとん汁を、自分の器にすきなだけついで、たくさん食べてやろう。

ロ 野村さんはとん汁が嫌いだから、わざと器にたくさんついで、からかってやろう。

ハ とん汁嫌いを先生に告げ口して、優等生ぶっている野村さんをこまらせてやろう。

ニ サイン帖を持って来もしないやつらには、腹いせにとん汁を乱暴についでやろう。

問4 —線③「大の字に横になる」とはどういうことか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 投げやりな気分であつぶせに寝ること。

ロ あおむけに寝てじっと動かずにいること。

ハ 満ち足りた気分だからだを横たえること。

ニ 両手両足を思い切り広げて寝ころがること。

問5 —線④「動物でいうならバンビだ」とはどういうことか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 野村さんがバンビのようにかわいらしく、守ってあげたくなるということ。

ロ 野村さんがバンビのように足がはやく、いつも元気いっぱいということ。

ハ 野村さんがバンビのようにおだやかな性格で、争いごとを好まないということ。

ニ 野村さんがバンビのように不安げで、何かにおびえているような表情だということ。



問8 作品全体から読み取れる、「恭介」の「大島先生」に対する気持ちはどのようなものか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 「恭介」が今の学校生活を楽しめないのは、男らしさに欠ける「大島先生」がクラスをしっかりとめてくれないせいなので、同じような先生が中学にもいたらいやだと思いい、うんざりした気持ちになっている。

ロ 「恭介」が男の先生に期待するものとはちがう「大島先生」の言動にいらだちながらも、先生もまた、慣れ親しんだ学校生活の無視できない一部であるだけに、どうしてもよい存在として忘れ去りたいわけではない。

ハ 「恭介」が卒業の寂しさや中学での勉強への不安のせいでイライラしているのに、「大島先生」は相変わらずのんびりで、授業でもきびしさが足りないのので、先生に自分の悩みを相談してもむだだとあきらめている。

ニ 「恭介」は「大島先生」の言葉や態度がいちいち気にさわって仕方ないが、それが実は、言いたいことをすなおに言えない自分の性格が「大島先生」に似ているからだと思っているのので、先生を憎んでいるわけではない。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を変えているところがあります。＊が付いた説明は出題者が加えたものです。）

明治四十一年（一九〇八）年に数名の塾生で始まった小さな裁縫私塾は、今日では、大学院博士課程を持つまでに発展を遂げている。この辺で、現在の大妻学院の生みの親である大妻コタカが、どのような教育方針を持っていたかについて少し触れておきたい。コタカが生きた時代の女子教育界とはどのようなものだったのだろう。

明治三十二年（一八九九）年と三十三（一九〇三）年は、わが国の女子教育をリードした優れた女性教育者が輩出した時代である。

明治三十二年には、下田歌子による実践女学校、翌三十三年に津田梅子の女子英学塾と吉岡彌生の東京女医学校、三十五年に戸板関子の戸板裁縫学校、三輪田眞佐子の三輪田女学校、三十六年に山脇房子の山脇女子実修学校、嘉悦孝子の女子商業学校などが続々と生まれた。

大妻コタカは明治四十一年、二十四歳の若さで、それら①先駆者たちのアンカーとしてわが国の女子教育界に登場したのだった。

教育者、といってもコタカは哲学者でも学者でもない。財閥の生まれでも豪商の娘でもない。金勘定に長けているわけでもなければ、洋行帰りでもない。当時のエリート女性が、数々の看板をひっさげて教育界に登場したのとは、まったく違っていた。コタカの教育は、すべて実践を通しての教育だった。

「あの頃の女学校の教育は、抽象的なものばかりで、少しも家庭生活に役立たなかった」と、コタカは大妻技芸学校設立当時の世相を皮肉まじりに語ったことがある。

女学校を終えたところで、裁縫も手芸もまったく実用にならず、「女学校は出たけれど……」と揶揄されて（\*からかわれて）いた。早い話が、文学だ外国語だ物理だといったって、実生活が充実してこそその学問ではないか。

コタカは、とかく頭でつかちになりがちな女学校教育に、実学の精神を持ち込み、実用的な技芸を教えることを②主眼とした学校を創った。

すべては自分の体験から滲み出た教育であるだけに、コタカの言葉には、相手を納得させずにはおかない迫力があつた。

旧態依然とした裁縫教室が、世の中の需要にこたえられないのをコタカは熟知していた。教育内容は時代に③即したものに換えなければならぬ。①、家庭に入る女性に求められる基本は変わっていないはずだ。

派手な宣伝をしたわけでもない。コタカは他校の女性教育者たちに比べたら、きわめて地味な存在だった。それでも娘を持つ多くの親の信頼を得て、続々生徒が詰めかけた。

②、裁縫や手芸はどうしたら、近代の娘たちの眼に魅力的に映るのか。  
いや、魅力的で、生徒たちが学びたいと思わなければ、教える意味はない。

コタカのオリジナリティーがいまでも評価されているのは、その「手芸哲学」とも呼べる教育方針だった。自分が手芸に打ち込んだ経験を通して、手芸が人間形成に深くかわると確信していた。

逆に言えば、人間を置き去りにしての学問にどれだけの価値があるのか。すべては豊かで幸せな人生を歩むための学問であってほしかった。

手芸が人間形成とどう繋がるのか。コタカによれば、まず「A」の習慣づけ」になるという。

「手芸はどんな大きな難しい手の込んだものでも、一つずつ積み上げていかなくはなりません。でも、努力しただけ、それがはつきり形となって表れます」

形になるから、それが励みになり、知らず知らず「X」化するということだ。

また、手芸は途中で手を抜くことはもちろんだが、一度に手早く仕上げてしまうことも、してはいけない。ただ仕上がりを悪くするだけだからだ。

常に一つひとつ落ち着いて取り組み、最後まで根気よくコンスタントに努力し続けなくてはならない。これが「B」の修養」になる。

コタカは、手芸を④グシンしてやってみた人でないと決してわからないこととして、「ものの値打ち」を挙げる。わずか一本の糸でも、それが葉となり花となることを知れば、一本の糸の価値に気がつく。

他人の労作に対しても、そのグシンや工夫、努力に共感することができるとして感謝の念が湧く。

さらに手芸に熟達すればするほど、手本の模倣ではなく、自分で工夫して新しいものを考案しようとするので、「C」を養う」と指摘している。

「そしてできあがった作品が暮らしの彩りになり、生活を美しく楽しくします。それが手芸の素晴らしいところでしょうね」

(中略)

コタカは創意【Y】を非常に重んじた。

自身が裁縫学校に通っていた時代、作品を提出する際、一枚出せばよいところをいつも二枚提出していた。

一枚は先生に教わったとおりに仕上げたもの。もう一枚は、自分なりの工夫を施した作品だった。

あれこれ工夫してみる喜びには、学びによる結果が必ず表れるからだった。⑤その効果のありようはコタカの教育実践が物語ってきたといえるだろう。

コタカは昭和十二（一九三七）年の『ふるさと』（\*同窓会の出版物）のなかで次のように述べている。

「私共がこの世の中を愉快に暮らしていく行為には、いつもこの、何かせずにはいられないという、生き生きとした心持ちを続けていくことが必要でございます。する仕事がなくなったら、積極的に仕事を作って働いてください。そうすると、心がいつも清々しく、体まで元気になり、少々の病気は逃げていきます」

（中略）

時間は⑥ユウイギに使え、成長し続ける、創意【Y】せよ、課題を見つけて働け。課題がないなら作り出せ。仕事は自分のためであり、人のためであり、社会のためでもある。とにかく仕事を楽しめ……。

きわめてポジティブなコタカの思考は、欧米社会にも通用する進歩的なものだった。

（工藤美代子『三番町のコタカさん 大妻コタカ伝』による）

問1 — 線①〜③の意味として最も適當なものを、それぞれ次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

- ① 「先駆者」 イ 先に帰る人    ロ 先に仲間になる人    ハ 先に活躍かつやくした人    ニ 先に生まれた人
- ② 「主眼」    イ 眼目    ロ 眼力    ハ 着眼    ニ 心眼
- ③ 「即した」    イ つながった    ロ かさなった    ハ ふさわしい    ニ 取り残された

問2 — 線④「クシン」、⑥「ユウイギ」を漢字に直しなさい。

問3 

一
---

・

ロ
---

 に当てはまる言葉として最も適當なものを、それぞれ次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。ただし、

同じ記号は一度しか使いません。

イ では    ロ つまり    ハ しかし    ニ だから    ホ なぜならば

問4 

A
---

・

B
---

・

C
---

 に当てはまる言葉として最も適當なものを、それぞれ次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

イ 勤勞    ロ 精神    ハ 理解    ニ 独創力    ホ 好奇心こうきしん

問5 【X】【Y】に当てはまる二字の熟語を、文章中からそれぞれぬき出して答えなさい。(ただし、【Y】は二か所ある。)

問6 —線⑤「その効果」とは具体的にどのような効果か。十字以上十五字以内でまとめて答えなさい。

問7 この文章から読み取れるコタカの学問や仕事についての考えを表すものとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 理<sup>りくつ</sup>屈ぬぎに楽しく働くことが、何よりも平和な国づくりに女性として協力することなのだとと言える。
- ロ 人間を置き去りにした学問に価値はなく、学問よりもまず、家庭生活の充実を大切に考えてほしい。
- ハ 自分や人のために何かせずにはいられないという思いは、私たちを清々しい気持ちにさせてくれる。
- ニ 実用的な技芸こそ人を幸せにする学問であり、日常を支えることが日本の女性としての誇<sup>ほこ</sup>りである。



